

今月の新着図書から

礒山雅『ヨハネ受難曲』（筑摩書房，2020 年）

高等科図書主任

林 知宏

私はバッハの音楽を心から愛する者である。学校に出勤するとき、時々家人に車で送ってもらうことがある。車内の音楽はいつもバッハである。休日、朝食の準備の BGM もバッハである。こうした嗜好は、大学生の頃、グレン・グールドの演奏に魅了されたことがきっかけだったと思う。また、生演奏でも多くの音楽家の様々なバッハの曲を体験してきた。とりわけ、すみだトリフォニーホールで聴いたヘレヴェット・指揮のヨハネ受難曲（1725 年版によるのではなかったか）の演奏は秀逸であった。曲が終了した時に、場内にしばし静寂が支配し、徐々に拍手が高まっていった。誠に稀有な経験で、忘れ難い。

バッハの研究者として著名だった礒山氏だが、初台のオペラシティで行われたバッハ・コレギウム・ジャパンのコンサートで何度かお姿を拝見したことがある。彼の遺著となってしまった本書は、バッハを聴くための深みのある情報を私にもたらしてくれた。バッハの曲は、たとえこのヨハネ受難曲のように宗教的な色彩を帯びているとしても、それと無関係に純粹に音楽として美しい。私にはそれだけで十分なのだが、より深く味わうためには、1) キリスト教の福音書の記述を始めとする背景を知ること、2) 楽譜を通じて音楽的な細かな仕掛けを読み解くこと、この 2 点は不可欠であろう。

著者は、1) についてキリスト教の四つの共観福音書（マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネによる）中の個々の場面の比較を通じて、イエスの死の記述に関してヨハネの福音書の特異さを強調する。同時に、ルターによる受難に関する解釈にバッハ自身がどのように影響を受けたのかの分析もある。そうした方面に疎い私にとってはありがたい記述であった。

2) について、ヨハネ受難曲は全部で五つの稿が存在する。複雑な創作過程を経ている点がマタイ受難曲と対比される。通常、1749 年の第 4 稿に基づく演奏が行われるのだろうが、テキスト、音楽が順に細かく分析されていく。こちらも音楽に関する専門的知識に乏しい私には有益だった。1725 年（第 2 稿）に独自の楽曲の分析も行われる。とにかく、音楽を CD で聴く際に、今までとは異なる味わいが可能になったことは確実である。

本書は、礒山氏が定年後に書き上げて、国際基督教大学に提出された博士論文がもとになっている。2018 年 1 月 26 日に口頭試問を終え、無事学位を取得することが決まった翌日、凍結した道路で転倒し負傷してしまう。その事故が直接の原因となって、翌月死去する。まさに「遺言」となってしまった作品である。遺族の了承のもとに論文審査の主査が遺稿を校訂し刊行した。昨年暮れには、同じ礒山氏の『マタイ受難曲』（ちくま学芸文庫）も文庫化されて出版された。併せて熟読し、バッハの曲により一層親しみたい。